



廣瀬川

第94号

平成30年
8月30日

仙台市小学校長会

発行者／吉田 秀夫（会長） 責任者／花淵 浩司（広報部長）

主張

互いに磨き合い、高め合う校長会 ～創意と活力に満ちた学校経営のために～

会長 吉田 秀夫（片平丁小学校）



この夏も、市内の小中学生が復興の思いや願いを込めて作り上げた折り鶴が、仙台七夕でにぎわうアーケードに飾られた。多くの方々が足を止め、その飾りを見て、子供たちの思いや願いを感じることができたであろう。震災から7年が経過し風化が懸念されるが、被災地仙台の学校に勤務する私たちにとって、震災を風化させない取組を継続することは課せられた使命だと認識している。

さて、今年度より新学習指導要領に基づく移行措置が始まった。各学校においては、改訂の趣旨を受け止めるとともに、全面実施を見据え、「主体的・対話的で深い学び」を追求する授業改善や「考え議論する道徳」への転換、教科としての外国語及び外国語活動の授業などに懸命に取り組んでいる。また、働き方改革が教育界にも求められている。とりわけ学校では、業務や運営体制を改善して、子供と向き合う時間を確保しつつ、教育の質を落とすことなく改革を進めることが必要とされている。さらに、仙台市においては、いじめや不登校防止対策が喫緊の課題であり、子供の不安や変化を見逃さないよう工夫するなど、地道な取組を精一杯行っている。

このような課題が山積する中であっても、校長は学校のリーダーとして、学校の目指すべき方向をしっかりと教職員に示さなければならない。近年、学校には、指導補助員やスクールカウンセラー等、

様々な職種の職員が配置されているが、校長は学校規模にかかわらず一人であり、学校の最高責任者として、教育活動の全てに責任を負う立場にある。

新任校長の時に読んだ書物に、「『校長室は思考・瞑想の場』であり、校長室がなぜ広いのかは、『理念』（戦略）を考え、戦術を『決断』するに当たり、熟慮の上で判断しなければならないからである。」という記述があった。すなわち、校長の職務は、様々な場面で判断・決断をすることであり、それが的確にできてこそ校長としての役割を果たしたと言えるということであろう。

直面する課題を解決するための判断・決断には、その状況を的確に把握するとともに、確かな教育ビジョンや豊かな経験に裏打ちされた高い専門性が必要である。そのため、私たち校長一人一人が率先垂範して自己研さんに励まなければならないことは言うまでもないが、容易に決断できない課題も多く、校長同士が互いに磨き合い、高め合う努力が必要であり、その場となるのが校長会である。

仙台市小学校長会は、結成以来、「共助の精神」を生かし、一人一人の豊かな人間性を結集しながら歩んできた。今後は、そのよき伝統を継承するとともに、校長としての志を高く掲げ、創意と活力に満ちた学校経営を目指して、互いに切磋琢磨できるよう着実に歩みを進めていきたい。

内 容

○主 張	1
○特集「新学習指導要領全面实施へ向けた外国語活動の展開」	2
○提言「復興に向けた創意ある教育」	3
○学区紹介「地域とともに」	4

○特色ある教育活動	7
○仙台市小学校教育研究会より	10
○退会者からのメッセージ	11
○新任校長所感	20
○編集後記	24

特集

新学習指導要領全面実施へ向けた外国語活動の展開 ～Let's try for future!～

佐藤 智則（富沢小学校）

今年度より2年間、新学習指導要領の移行期に入りました。さらに2年後の2020年には教科としての外国語が始まります。これまでの学習指導要領から新学習指導要領への改善点の一つに、「学び方」があります。「主体的・対話的で深い学び」といった、アクティブラーニングの視点からの学習過程の改善です。教科としての外国語が始まることにより、多様な文化的背景や価値観を持つ人々と協力しながら社会に貢献することができるよう、外国語によるコミュニケーション能力の育成が強く求められています。小学校中学年に年間35時間の「外国語活動」、高学年では年間70時間の「教科」としての外国語が位置付けられ、「教える時代Teaching」から「学ぶ時代Learning」に対応した指導の在り方の変化や、新しい教科の導入といった大きな変革に不安を感じる教員も多いかもかもしれません。しかし、必要以上に恐れる必要はないと考えます。小学校高学年に外国語活動が導入されて今年度で7年目を迎えます。これまでの外国語活動で大切にしてきた、体験的な活動を通して、コミュニケーションの楽しさを味わわせることを土台とし、教科化という枠組の中で「言葉」を広げ、中学校での学びにつながるようにして「コミュニケーションへの態度を育てていく」という根本は同じだからです。

本校では、「自ら学ぶ意欲と豊かな心を持ち、未来を拓くたくましい児童の育成」を教育目標に掲げています。「言葉を通じた児童同士の関わり合う力を育てたい」という思いで、3年目の外国語活動の研究に取り組んでいます。

研究1年目は、職員の研修と環境整備に取り組みました。文部科学省教科調査官の直山木綿子先生や東京学芸大学教授の粕谷恭子先生をはじめ、宮城教育大学や仙台市教育委員会等から講師をお招きし、年間12回の職員研修を実施しました。外国語活動を

教えた経験がない教員が多い中、研修を通して、小学校外国語活動の面白さを感じ、外国語活動に前向きに取り組む職員の姿が見られるようになりました。

研究2年目は、授業作りに重点を置いて研究を進めました。既習内容を児童の日常生活と結び付けながら、児童の学びをスパイラルに生かしてつなげる単元を構成し、自然なやり取りが生まれるような場面・目的・状況の設定を作ることに取り組みました。

3年目に当たる今年度は、2年間継続してきた研究の成果と課題を踏まえつつ、新学習指導要領を意識した取組に挑戦しています。児童が主体的に取り組むために、児童の伝えたい思いを大切に活動できるような、伝え合う必然性のある場面・状況を工夫しています。また、Teacher Talkから言葉の意味を推測させる場面を意図的に設定したり、ゴールとなる活動に児童が自分で選択して言葉を伝えられるような活動を仕組んだりして、児童の心と頭がアクティブに働く瞬間を生み出せるような、「思考」を大切に活動を取り入れた授業作りを目指しています。

週1回、15分間の外国語活動として始めた「全校トミリッシュタイム」も3年目を迎えました。テレビ放送を活用して、挨拶や相手に共感する表現など汎用性のある英語表現を取り上げて繰り返し触れさせています。そうして慣れ親しんだ表現を使って異学年で交流活動を行っています。児童同士の関わり合いの中でキラリと光る、学び合いの姿に、全校で続けて取り組んできたよさを見出しています。児童の中にじっくり話を聞こうとしたり、進んで相手に自分の気持ちを伝えようとしたりする態度が育っていると感じ、外国語活動の可能性の広がりを感じます。

まずは、自分でやってみることが明日への第一歩になると信じています。Let's try! We can!

提言

復興に向けた創意ある教育

みんな仲間! 他国文化や伝統を尊重しながら

第2地区会長 小林 好美 (国見小学校)

未曾有の震災から7年が経過し、今年の一年生は震災後に生まれた子供たちです。時間の流れとともに震災の記憶も次第に薄れていく中、子供たちには、自分で自分の身を守ることは最重要であり、しっかりと判断ができる力を育てていくとともに、誰に対しても分け隔てなく人を思いやる優しい心や気持ちを持ち、積極的に行動として表すことの大切さを教えていきたいと考えます。

本校の学区には東北大学国際交流会館があります。主にそこに滞在する留学生や研究生の子女を受け入れるために、平成4年度に「国際教室」が設置されました。担当職員が配置されているため、学区内に住居を借りている外国籍の保護者もいます。また、外国に関わる子供たち(親のどちらかが外国人)も在籍し、合わせると40名程の子供たちが本校で学校生活を送っています。日本語の理解力も個人差はありますが、国際教室担当者は必要に応じて、教室での入り込みの指導と国際教室での個別の取り出し指導で、日本語指導と教科指導を行っています。イスラム教では、食べてはいけないものが決められて

おり、保護者からの要望があった場合は特別に「宗教食」を提供し、ラマダンへの対応も行っています。また、保護者対応として、日本語理解が不十分な保護者向けに学年だより・通信票・保護者関係の調査や通知文等を英文で作成して、少しでも心配や不安感を取り除くように努めています。

今年度はインドネシア・タイ・エジプト・中国・韓国等様々な国の文化を持った子供たちが在籍し、日本語も理解できず不安な顔つきで教室に入っているのもつかの間、クラスの子供たちが身振り、手振り、知っている英語の単語を並べながら、必死にコミュニケーションをとろうと頑張る姿があります。ごく自然に仲間として受け入れ、困っている様子を感じ取ると、何とかして伝えようとする姿勢に温かくほのぼのとした空気を感じます。

肌の色や目の色、文化が違ってても、人を思いやる優しい心や気持ちを積極的に行動として表すことができる子供たちに育てていきたいと切に思います。

提言

復興に向けた創意ある教育

子供たちと共につくる将監小を目指して

第4地区会長 中廣 治 (将監小学校)

「あいさつは心のリボン」「かがやく自分!」
「広げよう やさしい心」「えがおで 心も体も元気」

これは昇降口の扉一面に掲示している標語です。

将監小の目指す学校像は「笑顔広がる温かい学校」。日々の学校生活の中で子供たちと、そして教師間で確認し合い、全校集会における校長講話の中にも毎回のように登場するキーワードです。

今日、いじめ対応・不登校対策を喫緊の課題として未然防止、そして適切な対応が求められています。当校でも学校運営の核として位置付け、日々指導を進めていますが、その基盤となるものはやはり心の育成ではないかと考えています。心身の健康が健やかな成長には欠かせないものであることは言うまでもありませんが、残念ながら心の中は決して形として見えるものではありません。だからこそ、様々な形で子供たちに「豊かな心」につながる種をまいていくことが必要であり、子供自身に何かを感じ取ってほしいという願いを目的にしたスローガンです。

同時に指導する先生方にも、毎回の職員会議資料の冒頭にさりげなく校長から、「心に響かせたい一言」を添えて示しています。

将監小では、27・28年度に健康教育推進校として、研究を深め、その取組は現在も継続しています。よりよい生活習慣の大切さ、そして健康な体への関心を高めること、そして定着を図ることを目指し家庭と連携して活動を進めています。その中で体の健康と同時に心の健康も進めてきました。

今年度の児童会活動のスローガンは「笑顔と元気いっぱい、はばたけ将監小」。また児童会主体の挨拶運動では児童がそろいのベストを着用し、手にはのぼり旗を掲げています。そこに記されているのは「みんなで心のかようあいさつ、笑顔広がる将監小」です。子供たちにも学校として目指す方向が共有できていることが、何よりもうれしいことです。これからも子供たちと共にすてきな学校づくりに取り組み、いじめ・不登校を生まない、笑顔いっぱいの将監小にしていきたいと思えます。

提言

復興に向けた創意ある教育

震災の記憶を伝えて豊かな心を育む

第6地区会長 仲野 繁俊 (連坊小路小学校)

東日本大震災の記憶の風化が課題の一つとなっている。本校は発災から3年間、学校で行った復興プロジェクトの中で、子供たちの描いたポスターを商店街に掲示してもらったり、朝の挨拶運動に取り組んだりするなど、地域活性化の一助として活動してきた。しかし、子供たちが大震災について知らないことがたくさんあることに気づき、自分たちにはもっとできることがあるのではないかと考えた。

平成25年度から「レインボープロジェクト」(本校独自の復興プロ)が、総合的な学習の時間(6年生)の年間指導計画に、新たな学習テーマとして組み入れられた。活動のねらいは、震災をもっと身近な問題として捉え、自ら積極的に働き掛けていくことを通して、防災について多くのことを学び、これからの生活に生かしていくこととした。

活動内容は、①被災した方々を学校に招いて、当時の様子や震災の教訓などの話を聞くこと。②被災地、被災した学校や施設、慰霊碑、避難タワーなどを見学し、当事者の方々の話を聞くこと。③学習を

通して学んだことをリーフレットにまとめ、校内や保護者、地域に発信することなどである。

震災の追体験は、子供たちの感性を豊かにし、防災・減災の意識を醸成する。子供たちは活動の中で、大地震から大津波までの緊迫した様子や間一髪の避難、当時の悲惨な状況、復興が途中であることなどを実感する。また、当たり前にあるはずの学校がなくなる現実を想像し、慰霊碑に幼子の名前を見つけて、被災した方々の深い悲しみに思いを馳せる。そして、当時の状況や取組を学び、表現する。

「まだ小学生の私たちが災害を防ぐためにできることは多くはありません。しかし、下の世代に語り継ぐことや、震災をよく知らない人に伝えることはできます。そのためにも、レインボープロジェクトで学んだことを、しっかり心に刻みたいと思いました。」昨年度、子供の一人が残した感想である。

貴重な教訓を継承し、自分の言葉で伝えるようになることを切に願っている。今後も、命の尊さや支え合うことの大切さを発信し続けねばなるまい。

学区紹介 地域とともに**いつも感謝の心で、
とびっきりの笑顔で**

岩崎 薫 (八木山南小学校)

今年度、本校は開校42年目を迎えました。これまで、地域の多くの方々や保護者の皆様に支えられ、助けられ、今日を迎えることができています。まさに、学校は、地域の中で生かされ、育てられているのだと実感させられます。地域の方の中には、開校当時から長年にわたり、学校に関わっていただいている方もいらっしゃいます。大変ありがたいことと感謝しています。ほぼ毎日、日常的に地域の様々なボランティアの方々やPTAの方々が、学校に出入りしています。スーパーバイザーさんのアイデアで、卒業した中学生も、放課後にお手伝いに来てくれることもあります。それぞれが無理なく自分の時間の都合に合わせて、気持ちよく来られることが、長続きの秘訣にも思えます。本当にありがたいことと感謝の気持ちでいっぱいです。

先日、外部の方から学校に1通のメールをいただきました。「交差点で車を停止し、横断する小学生

の子供たちを先に行かせところ、子供たちのすばらしい姿勢のお辞儀と気持ちのいい笑顔に元気をいただきました。ありがとうございました。」という内容でした。本校では、協働型学校評価の重点目標の一つに「笑顔で挨拶ができる児童の育成」を掲げています。地域で地域の将来を担う子供たちを育てるためにも、「まずは大人から笑顔で元気に」を合言葉に、学校と各家庭、各地域の方々が中心となり挨拶運動に取り組んできたところです。毎朝、6年生の子供たちも自主的に校門で挨拶運動を行っています。それをまねする下級生も見られます。今回のメールでのお褒めのお言葉は、子供たちにとっても、保護者や地域の方々にとっても大いに励みになります。大変うれしいことです。少しずつでも「笑顔で挨拶」の輪が広がり、地域の中でお互いが気持ちよく生活できるよう、学校としての役割を十分に果たしていきたいと思えます。

「学校は地域とともに育っていく。地域の中で生かされている。」このことを肝に銘じ、何事も感謝の心で、とびっきりの笑顔で絶やさず、学校経営に尽力してまいります。

学区紹介 地域とともに

仙台市最西端の学校

古元 良和 (作並小学校)

作並小学校区は、仙台市の最西端で、広瀬川の上流に位置し、山形県境まで広範囲にわたっている。

明治6年に現在地とは異なる川崎に開校し、明治20年に愛子尋常小学校作並分教場、昭和17年に上愛子国民学校作並分教場となった。その間昭和5年に現在地に移転し、昭和23年に上愛子小学校から独立した。また、現在休校中(平成24年度から)の新川分校は、本校と同じ明治6年、秋保村立長袋小学校新川分教場として開校し、明治43年に現在地に校舎新築移転した。昭和16年以降、三度の改称後、昭和30年の町村合併に伴い、宮城町立作並小学校新川分校に改称された。

学区内を東西に貫く国道48号線は、仙台市内と山形県をつなぐ幹線道路で交通量も多く、観光シーズンにはかなりの渋滞となる。四季折々の風物を楽しめる自然に囲まれた環境にあり、作並温泉や奥新川、鳳鳴四十八滝、ニッカウキスキー仙台工場など

に行楽客が多く訪れる。作並こけしは古くから全国的にも有名である。また、平成7年から「広瀬川はたるの会」が新川地区を含めて宮城地区に蛍が生息する環境を整えようと様々な行事を行いながら取り組んできた。その取組の一つの「はたるの里宵まつり」が、蛍が飛び交う時期に新川分校を会場として開かれている。開催は困難と思われた震災の年にも、新川の人々の熱い思いで開催を継続してきた。

保護者や地域の方の教育への関心は非常に高く、学校の教育活動に対して積極的に協力をしていただいている。全児童家庭がPTAの役員である。

昭和34年をピークに在籍児童数は減少し、今年度は全校児童19名、低、中、高学年の複式学級である。少人数できめ細かく子供を見取り、個に応じた指導を行うことができる。しかし、どうしても一定規模集団内での理想的な学び合いが困難である。より多くの仲間と関わり、学び合う機会を設けることを目的に、近隣の大倉小学校、上愛子小学校と3校交流学习事業を平成23年度から行っている。

身近な地域の良さを理解し、自信を持って表現する子供の育成を目指して教育活動を展開している。

学区紹介 地域とともに

地域に育まれる高森っ子

小原 純 (高森小学校)

高森小学校は、泉パークタウン一番目の小学校として、昭和52年に児童数73名で開校しました。当時の新設小学校開校基準に満たない人数でしたが、高森地域に住んでいる皆様の強い要望と高森の発展を見込んでの開校となりました。開校後、児童数も増え続けて昭和59年には児童数が1416名となり、校庭にプレハブ4教室を建てました。昭和60年に寺岡小学校、平成3年には高森東小学校が開校し児童数は落ち着きました。その後は、減少の一途をたどっていましたが、現在は再開発もあり、児童数も増え260名前後で推移しています。

学校を取り巻く環境はすばらしく、閑静な住宅地の中にあり、学校の敷地内に「にこにこ山」「いきいき山」「すくすく山」と名付けられた三つの山があり緑に囲まれた中で子供たちは生活しています。

教育活動を進める中で、父母教師会、子ども会育成会、体育振興会、おやじの会、町内会、児童セン

ター、市民センター、花植ネットワーク、春秋会(老人会)など地域の方々との連携がたくさんあり、子供たちは多くの方々を支えられています。昨年度、40周年記念式典を行いました。そのシンボルキャラクターとして「ひまらいおん」が採用されました。「ひまらいおん」とは、東日本大震災後に元気をなくしてしまった高森の子供たち、その子供たちの心を明るく照らす太陽のようなひまわりを植えようと「ひまわりプロジェクト」が企画され、そのシンボルとして作ったキャラクターです。地域が一体となって子供たちを励ましてくださいました。また、平成24年から学校支援地域本部も結成されて、米作り・全校サツマイモ植え・安全マップ作り・小一学習サポーター・スキー教室講師等々で年間延べ人数380人もの方々に御協力をいただいています。

このように高森小学校と高森っ子は、地域に大切にされて育てられてきました。この高森地区で育まれた子供たちが、大人になり地域に帰り、自分たちが育てられたように、高森地区の地域の活動に参加し、高森小学校の子供たちを育てていくようになってくれればと願っています。

学区紹介 地域とともに

地域とともに歩む

後藤 芳浩 (中野栄小学校)

本校は、仙台市の東端にあり多賀城市と隣接し昭和51年に仙台市立小学校59番目の学校として開校しました。学校から徒歩5分ほどの所に、昭和56年に地域住民の請願により誕生した、当時としては東北初の橋上駅の仙石線中野栄駅があります。

東日本大震災では、学区の7割近くが浸水し、仙台港から直線距離で2kmほどに立地している本校の敷地内にも10cmほどの津波が押し寄せてきました。その後校舎が被災した中野小学校が併設となり、同一の校舎で共に自校の学校再開・教育活動の推進を目指して、復興への思いを込めてにこにこの城(二校二校)で頑張ってきましたが、残念ながら平成28年3月に中野小学校は閉校となりました。

被災地域として、防災に関しての意識も高く、毎年防災マップづくりにも取り組んでいます。事前に防災チェックシートを家庭に配付し、家庭で相談して記入し、それをもとに子供会ごとに話し合って防

災マップを完成させています。

平成26年度から3年間は、学びのコミュニティづくり推進事業に参加し、「中野栄楽舎」の名称で学校キャンプやEポート体験、もちつき会、おしるこ会等の活動を実施しました。地域の多様な各団体とも連携して、子供たちの健やかな育ちを支援するための活動を推進してきました。

中学校区での様々な連携の結びつきも強く、3校連絡会は、昭和63年に立ち上げられ30年も続いている取組で、年に3回各校の生徒指導の課題について情報交換を行っています。また、毎年8月に小中合同研修会を行い、三つの分科会(自分づくり、学力向上、地域連携)に分かれ、9年間を見据えた児童生徒の育成について、検証と修正を行う機会を設けています。さらに小中児童生徒や町内会からも参加し、「ふれあい挨拶運動」や「地域清掃」「ふれあい交流会」の活動にも取り組んでいます。

その他にも、見守り散歩隊による朝の見守りや学校支援地域本部の活動等、地域の方の多くの支援をいただいています。今後も、地域とともに歩む学校づくりを基盤に学校経営を推進してまいります。

学区紹介 地域とともに

保護者、地域、近隣校とともに

近澤 裕子 (西多賀小学校)

本校は、明治6年開校、児童数530名、特別支援学級を含む21学級編制の学校である。学区は太白区西多賀地区の国道286号線の北側と南側にまたがる。古くからの住宅地と比較的新しい住宅地・アパート・マンションが混在。富沢中に多くの児童が、西多賀中に1割程度の児童が進学している。東日本大震災では、校舎2棟のうちの1棟が使えなくなり、体育館やプレハブ校舎での授業を余儀なくされた。

今年度、協働型学校評価の目標を新たに「お互いに助け合えるあたたかい心を持つ児童の育成」とし、校内研究を道徳にして、よりよい学級づくりと授業づくりを研究している。PTAも協働型目標を検討、「おやコミュニケーションのススメ～親子の会話・コミュニケーションの工夫～」に決め、各家庭に親子で過ごす団らんの時間の大切さを啓発している。

富沢中、富沢小には以前から学校支援地域本部がある。一昨年度、近隣の犬野田小が富沢中の支部と

して地域支援本部を開設。本校はこれまで、小1サポーターや生活科のお手伝いなどは保護者がメインで、学年ごとに募集していたが、人材を広く地域に求め、様々な立場の多くの人たちに子供たちを育てていただこうと、昨秋、富沢中の支部として「地域教育協議会」と「西多賀小学校支援地域本部」を立ち上げた。スーパーバイザーは、長年防犯巡視ボランティア員をしていただいている地域の男性、図書事務員でもある民生委員の女性、PTA会長の男性の3名。学校支援地域本部の知名度はまだまだ低いですが、これを契機に、この先、地域の皆様に積極的に児童に関わっていただけることを期待している。

昨年度、富沢中学校の生徒会と本校の児童会とが連携し、児童・生徒による挨拶運動に取り組んだ。年間数回、登校時間帯に中学生が小学校に来校、昇降口で一緒に声掛けした。最終回には記念にドッジボールの相手をしてもらい、和やかに締めくくった。

教育課題は複雑化し、核家族化や高齢化で子供を支えることが難しくなっている。だからこそ、地域の連携・協力が必須。保護者や地域、近隣校と連携を密にし、緩やかな歩みで学校経営を進めたい。

特色ある教育活動

「豊かな自然」と「温かな地域の力」を生かして

小野寺 治歌（太白小学校）

1 本校について

本校は、仙台市西部に位置し、今年度開校40周年を迎える。校庭からは四季折々の太白山の姿を見ることができ、太白山の裾野に広がる豊かな自然に囲まれている。学区内に「太白自然観察センター」や「ほたるの里」があり、「仙台市縄文の森広場」も徒歩圏内である。

地域の方々は、学校の教育活動に非常に協力的で、学校からの要請に多くの場面で惜しみない支援をいただいている。

児童は、全体的に穏やかで素直である。勤労意欲も高く、縦割りグループでの清掃活動を日常的に行っているが、喜々として働く姿が見られる。

2 特色ある教育活動について

(1) 落ち葉拾い～循環型の社会を意識して～

たくさんの樹木に囲まれていることもあり、秋になると校地の周りや通学路にたくさんの落ち葉が積もってしまう。そこで「地域の方々と協力して太白をよりよくしていく」という目的で、「落ち葉拾い週間」を設定している。学年ごとに勤労生産的行事1時間の枠で学校周辺の通学路や校地内の落ち葉を集め、まとめておく。2トントラック2台分ほどになった落ち葉に関しては、リサイクルネットワークと連携し、腐葉土にするために回収していただいている。児童らは、地域の方々と協力して太白小学区をきれいにする活動を通して地域への愛着をより一層深め、さらに落ち葉が役に立っていることを学習して、リサイクルへの興味関心を強めている。

(2) 稲作体験～総合的な学習の時間～

太白山自然観察の森の入り口がある地域は、佐保山という地区で、策川が地区の中央を流れている。その佐保山にお住まいの方の田んぼをお借りして、5年生の総合的な学習で「稲作体験」を行っている。代かきや田植え、稲の生育状況の観察、そして稲刈りに脱穀と稲作に関する体験的な学習を積み上げていく。学校から徒歩で15分という好条件だからこそできる学習である。児童らは「稲

作」の大変さを身をもって経験し、机上だけでは学ぶことができないことを体で吸収している。

この学習の際も、多くの地域の方がボランティアとして支えてくださっている。特に高齢の方々が多く、活動を通して異年齢のつながりができることも地域の活性化につながっていると感じる。

(3) 太白山自然観察センターの活用

主に、3年生の総合的な学習の時間において年間を通して活用し、四季折々の樹木や動植物、昆虫等の観察を行っている。レンジャーさんに説明していただいたり、ボランティアの方々に教えていただいたりと、この学習においても地域の様々な方に大変お世話になっている。

自然の懐の深さを感じるとともに、地域の方の温かさを体感する学習になっている。



1,2年生も3年生と一緒に観察センターにおいて学習を行う機会があり、縦割りのつなが

りづくりにも成果がある。

(4) ほたるの里の活用

「策川ほたるの会」の方々が、ほたるの養殖をなさっている場所である。ここも3年生が学習で利用している。自然保護の大切さを体験的に学ぶことができる活動になっている。

3 まとめ

本校ならではの「豊かな自然」と「温かな地域の方々の力」を生かした教育活動の一端を述べさせていただいた。校長としては、この魅力的な太白地区の特色をまだまだ生かし切れていないと感じる。今後も諸先輩方から御教示をいただきながら、より子供の生きる力へつながる特色ある学校づくりにまい進していく所存である。

特色ある教育活動

地域とともに歩む児童の育成を目指して

阿部 恭太 (市名坂小学校)

1 はじめに

本校は平成16年に、七北田小学校から分離して開校した小学校であり、地下鉄泉中央駅を含む東西に広い学区を持つ。マンション等の集合住宅が多数存在し、新しく集まってきた住民が多いことから、1年間の転出入が昨年度は55名と多数に上る。

そのような地域にある学校であるが、地域の方々からたくさんの支援をもらいながら、この市名坂小学校に在籍しそして卒業して良かったという思いを持たせられるような取組が多数実践されている。

2 地域の協力

(1) 学校支援地域本部を中心とした協力

学校支援地域本部「いっちーず」は、各種教育活動のボランティア要請と確保を行ってくれる。スポーツテスト、小1生活学習サポーター、校外学習の付き添い等、ボランティアの年間延べ人数は1,500名を超えるほどである。また、ボランティアの要請にとどまらず、夏休みには地域在住の様々な先生を招いて夏の講座を開講したり、PTA主催のお祭りにも出店して参加したりするなど、子供たちが地域の様々な人々と触れ合う機会を提供してくれている。さらに、七北田小学校の学校支援地域本部との協力関係も構築されており七北田中学校区で子供たちを育てていこうという組織にもなりつつある。

(2) 地域の学習

3年生の総合的な学習の時間では、地域在住の郷土史研究家をゲストティーチャーとして招いて市名坂地区の歴史を学習している。今はマンションが多く昔とは様変わりしている地域ではあるが、郷土史研究家の方から市名坂や七北田に残る歴史的な建造物や、今は無くなってしまったがそ

の痕跡だけがうかがえるもの等、市名坂地区の歴史について教えてもらっている。自分たちが住んでいる市名坂の歴史を知ることで、市名坂を再認識し、自分のふるさととして大切に守り伝える意識を育てることに協力していただいている。

(3) 「学校の森」の取組

仙台市「100年の杜」計画の一環として設置された「学校の森」がある。広さ1,000平方メートルほどの狭いスペースではあるが、市名坂地区の環境の変化に伴い、子供たちの自然に触れる機会の減少を心配し、その場所をなんとか学校にという学校の思いが地域住民の願いと一致し平成21年に完成した。建設までは仙台市が行ったが、維持管理は学校と地域が協力して当たることが条件となっていた。PTAや学区内五つの町内から援助をもらいながら運営している「学校の森」は、休み時間には虫採りをしたり草花を摘んだりして自然に触れることができる場所になっている。また、4年生以上の子供たちは、学校の森運営委員の皆さんに指導を受けながら植栽を行い、地域住民と子供たちが一緒に活動をする場ともなっている。

3 おわりに (今後について)

このほかにも地域の方々から協力を得ながら教育活動を展開している。教職員の多忙が問題となり、地域の方々と一緒に活動には打合せも必要となり、そこも多忙感、負担感の一因となっている。しかし、子供たちの市名坂小学校に在籍しそして卒業して良かったという気持ちを持たせるためにも、地域の方々とは是非とも続けていかなければならない教育活動である。

特色ある教育活動

豊かな心と力の育成を目指して～地域で学ぶ子供～

佐藤 潤一（荒町小学校）

1 はじめに

伊達政宗公が城下町を創設以来、寛永年間に荒町が造成され、伊達家米沢藩時代からの町人町を移したと言われていました。本校は、その仙台藩の御譜代町だった地域を学区とし、明治6年に一番小学校として開校しました。校歌の歌詞『白萩の花 塵もなく 遠い歴史が薫ってる』にあるように、長い歴史を肌で感じることができるすばらしい環境の下、子供たちが、心正しくたくましく、学んだことを生かして社会に貢献していけるように教育活動を進めています。

2 荒町小学校支援地域本部の活動

荒町小学校支援地域本部は、子供たちの学びと健全育成を支援する、地域につくられた学校の力強い応援団で、学校・家庭・地域の総ぐるみによる子供の健やかな学びを目指しています。

子供たちがよりよい学びをしていくために、

- (1) 学校だけではなく家庭、地域も学びの活動を支えていくこと
- (2) 子供がいろいろな人に接し、経験を積み重ね、考えることに楽しみを感じて育つ豊かな学びの環境をつくること
- (3) 大人にとっても、子供の健やかな育ちに関わり自らの学びや自らを生かす契機とすることを大切にしています。

学習へのゲストティーチャーの紹介、小1生活学習サポーターや校外学習付添いなどのサポーターの紹介、校舎清掃、グラウンド整備などの環境整備ボランティアの紹介、防災出前授業、そして防犯見守り隊の活動支援など、その活動は多岐にわたり、それをコーディネートするスーパーバイザーの方との連携は充実したものとなっています。

3 職場体験学習の実践から

第6学年では、総合的な学習の時間において、将来の夢や希望を持たせることをねらいとした「自分づくり」学習活動を行っています。

そのねらいは

- (1) 身近な地域社会の仕事に触れることで、働く意味を考えさせる

(2) 職場体験学習を通して、自分自身を見つめ、将来の夢や希望を持たせる

(3) 職場体験学習を通して、これまでお世話になった地域の方々への感謝の気持ちを育むの三つです。

この学習活動は、荒町商店街の店舗や施設の協力を得て、仕事に携わっている方々の仕事への情熱や、荒町商店街振興への思い等を職場体験を通して理解し、自分のこれからの生き方を考える契機とする大切な活動です。

その学習活動の一部を紹介すると、

○仕事についての体験談等を聞かせていただく。

- ・仕事のやりがい、気を付けている事等
- ・営業を続けるにあたっての苦労話等

○仕事の様子を見学する。

- ・仕込みや商品の陳列等
- ・対応の仕方等

○仕事の手伝いをする。

- ・掃除や商品の陳列
- ・接客（販売や挨拶等）です。

協力をいただいている店舗や施設は、魚屋、団子屋、パン屋、生花店、呉服店、薬局、写真屋、コンビニエンスストア、美容室、郵便局、保育園、市民センター、児童館、等20店舗ほどです。子供たちは、いつも見ている店の様子からは分からなかった、職業人としてのやりがいや、苦労等を肌で感じ、自分の将来を考えることができ、その様子を温かく体験先の大人の方が見守ります。子供たちが感謝の気持ちを込めて書きお届けした手紙は、今でも各店舗に飾られています。

4 おわりに

商店以外にも、体育振興会、福祉協議会、町内会、防犯協会、民生委員児童委員、等の方々が、いつも学校教育に関わっていただけるこの学びの環境で、豊かな心と力を育み、次の社会を担う立派な大人への成長を促していきたいと思います。



仙台市小学校教育研究会より

学校現場により還元できる市小教研を目指して

仙台市小学校教育研究会 会長 堤 祐子 (立町小学校)

平成32年度の小学校における新学習指導要領本格実施を前に、学習内容と共に、これからの学校教育を担う教員の資質能力についてもこれまで様々な議論がなされてきた。

その背景には、社会環境の急速な変化や学校を取り巻く環境変化が挙げられるだろう。特に、大量退職と大量採用に伴う年齢、経験年数の不均衡による弊害は今後大きな課題となることが予想される。

その際に当然、教員の研修の必要性が論じられるわけだが、学校多忙化や自ら学び続けるモチベーションを維持できる環境整備、初任者研修等の制度や運用の見直しなどが課題になっている。

そのような課題を解決していくために、仙台市小学校教育研究会が果たしている役割を振り返ってみる。

1 各校の実践に生かされる仙台市小学校教育研究会の取組

平成27年2月に一部改正された『仙台市小学校教育研究会実施要項』に目を通してみると、2 会合の種類と運営(1) 代表者会の項目に「代表者会の開催以前に、各校は、校内の教科・教科外の部会を必ず持つように配慮し、その意見を代表者に反映させる」とある。

市小研のスリム化という視点では、今後、代表者会の持ち方は検討していく必要はあると思うが、少なくとも研究会の立ち位置として、あくまでも各学校での教科・教科外の取組をベースとした、より実践的な組織でありたいというこれまでの市小教研を支えてきた諸先輩の思いを強く感じることができる。

特に、平成22年度に発足した外国語活動部会は、仙台市以外の組織化がまだまだ困難な状況の中で、いち早く組織をスタートさせ、平成28年2月には、「全国小学校英語活動実践研究大会 仙台大会」を開催するなど、全国でも先駆けた研究組織として、その地位を確立している。

その要因として、新しく立ち上がった部会ということもあり、設立準備委員会に関わった校長先生方始めその後の部会長の校長先生方が、最初から市教委や在仙の大学と継続性がありつつも緩やかな連携の道筋を作っていたことがあげられる。

このように、他の部会においても仙台市小学校教育研究会は、学校現場に直結した有意義な実践を通して、現場の先生方の力量向上に寄与している。今後も会の組織運営に見直しをかけながら、時代に即した研修組織を確立していきたい。

2 “知るは楽しみなり” ～講演会のすすめ～

毎年1回開催されている講演会は、仙台市中学校教育研究会と隔年で運営分担をし、弘済会と共に主催している。先生方に幅広い教養と広い視野を育てていただきたいという目的で開催する仙台市小学校教育研究会では、事業の大きな柱の一つである。

本年度は、(株)チャックスファミリー代表取締役の安孫子薫氏をお招きして、「ディズニーとキッザニアに学ぶ 子どもがやる気になる育て方」と題して、御講演をいただく予定である。

『ディズニーの魔法のおそうじ』の著書でも見られるように、職員のモチベーションをあげながら魅力的な職場環境作りを行ってきた安孫子氏のお話は、学校現場でも大いに役に立つこと間違い無しである。

3 おわりに

仙台市小学校教育研究会の会長を務めさせていただき2期目を迎えた。改めて過去の資料に目を通してみると、先輩の校長先生方が英知を結集し、自分たちの自主的な研修の場として、また、次世代の教員を育成する場として、この市小教研を熱心に運営してきたことがうかがえる。

先駆者である諸先輩方には遠く及ばないが、市小教研が今後とも学校現場にとって有意義な研修の場であり続けるために微力ながら尽力していきたい。

退会者からのメッセージ

後輩に期待すること



「君たちはどう生きるか」校長として

赤間 宏 (前 東二番丁小学校)

復興というテーマから離れること、御容赦あれ。

校長としていかに生きるか。教育指導、教職員の管理監督、危機管理、後輩の育成、保護者対応等々、校長職にある者の永遠の命題なり。以下に私見列举。

1 先人たちの書物から学ぶべし

近視眼的なノウハウに終わることなく、教育原理や哲学を深め、学校教育の本質を反すうすべし。

2 先輩たちに学ぶべし

教頭、教務、教諭の各時代に敬服したあの校長なら何と言うだろうかと想像せよ。また、校長室に掲額する歴代校長の足跡にも示唆有り。捜すべし。

3 困った時にはためらわず教を乞うべし

校長会や市教委の知恵を借りよ。煮詰まる前に足を運べ。ただし、校長としての主体性を失わずに。

4 たすきを渡すべき後輩を育てよ

自分が受けた恩は次世代に「恩伝え」すべしと、元宮城県立光明養護学校長の庄司憲夫氏は言う。「誰かの腐葉土になれるような人生を送りたい」と畠山重篤氏（「森は海の恋人運動」提唱者）は語る。私は、汗や涙や教育愛の染みこんだたすきを確かに受け取った。そして、若干の思いを加えて彼・彼女に渡したはずだが…。「赤間なら何とするか」と想像し易くして。

妄言多謝。

果たして、君たちはいかに生きるか。健闘を祈る。

心に残っている言葉

渡邊 大助 (前 木町通小学校)

その1……十数年前、初めて教頭として着任するときに、当時の校長先生から「立場は変わるけれども、次の仕事にもあなたのスタンスで取り組みなさい。それが一番です。」と言葉をいただき、余計な肩の力を抜くことができ、ほっとしたことを今でも覚えています。それなりに頑張ってきたつもりではありますが、基本的には自分のスタンスで過ごした教員生活38年間でした。もちろん、先輩や同僚に恵まれてのことだと思っています。校長としては、会員の皆様はもちろんですが、教頭や教務主任に助けられたという思いを今になって改めて感じています。感謝の気持ちでいっぱいです。

その2……医師の日野原重明先生の言葉。「いのちとは、時間である。時間をどのように使うかが大切。そして、時間を誰かのために使ってみよう。」

その3……「何のために勉強するの?」「世のため、人のため。」単純で分かりやすいと思います。

4月から「自分のスタンスで」、できれば少しは「誰かのために、世のため・人のために」過ごしていきたいと考えています。

想定外はない

小野 順 (前 東六番丁小学校)

新任校長として1年が経過しようとしていた3月11日は金曜日でした。卒業式を間近に控え、同窓会入会式を始めようとした時に東日本大震災が起きました。

先輩校長から教えられていた言葉が頭をよぎりました。①人命最優先、判断基準は児童②危機管理（リスクとクライシス）③最悪を想定し、最善を尽くせ④最善を望みつつ、最悪に備えよ

あの日以来、「想定外の出来事」という概念はなくなりしました。学校における危機管理は起こりうるすべての事象がその対象となりました。校長一人の発想では限界があります。全職員・関係者が知恵を出し合い、危機を想定し対応しなければなりません。

あの当時、私を支えてくれたのは教頭先生でした。10日間近く、寝食をともにして避難所対応にあたってくれました。職場内のコミュニケーションが重要であることを再認識しました。

7年の歳月が経過し、記憶は徐々に薄れてきています。私たちの使命はあの日、あの時の出来事を風化させることなく次世代につないでいくことです。

37年間の教員生活を送る中で多くの方々に支えて頂きました。感謝の一言しかありません。

教育は「愛」と「人」と「使命感」です

坂本 憲昭 (前 荒町小学校)

昭和56年4月1日。(当時)加美郡中新田町立中新田小学校に着任して、私の教員人生がスタートしました。それから37年。本当によく続けることができたと思っております。

これまでの教員人生を振り返り浮かんでくる言葉は、「愛」と「人」そして「使命感」です。

「愛」。学生時代、教師とは何か。教育とは何か。よく議論しました。その時に浮かんだのが「教育とは愛である」という言葉です。担任時代は本当に子供を愛したと思います。子供が好きでたまりませんでした。37年間、「教育とは愛である」という言葉を忘れることなく教員人生を全うできたことに幸せを感じています。

「人」。着任した先々の学校で、すばらしい人(仲間)と出会い、教員として、社会人として育てていただきました。人間相手の仕事だからこそ、人から学び人へ返すことが教員の生き方だと思います。

「使命感」。校長に欠かすことのできないものとしてこれがあることを強く感じました。自分は何のために校長をしているのか。校長として何を目指すべきなのか。校長会はどこへ行くべきなのか。等、考えるほどに職務の重さを感じました。よく学校は船にたとえられますが、使命感を持たない校長は、目的地を見失った船長と同じです。皆さんは自分の船がどんな役割を持ってどこへ向かっているのか常に見失わず、船に乗っている子供たち、教職員を、そ

の目的地に届けてあげることが校長の使命だと考えてください。無事に安全に届けた時の喜びは、校長だけが味わえる、最高の宝物になります。

震災後に考えたこと

今野 克則 (前 榴岡小学校)

東日本大震災が発生したのは、私が新任校長として着任し、2年間勤務した川前小学校から市教委の健康教育課に転任となった平成22年度末でした。学校再開や震災からの復旧・復興の業務に当たりながら、たくさんの尊い生命が失われた中、生き延びた私たちにできることは何だろう、大震災を経験した今だからこそできる教育は何だろうと考えました。そして、子供たちに改めて自他の生命を大切に、尊重する心を育むことや他者を思いやり、自分のできることで周りの人に手助けできる態度などを養っていくことではないかという考えにたどり着きました。その後、校長として着任した岩切小学校や榴岡小学校でも子供たちの豊かな心を育む教育を学校経営の中核として進めてきました。

人間は決して一人では生きられません。たくさんの人と出会い、助け合い、励まし合いながら生きています。人は、誰かの役に立つことによって存在価値を一層発揮するものです。自分を必要としてくれる人の存在に気付き、喜んでもらえたという実感が幸せをもたらします。人は誰かを幸せにしたとき自分もまた幸せな気持ちになるものです。私たちが「他者意識」を持って、子供に寄り添った指導を続けていかなければなりません。教育は子供の未来につながる営みという自覚と誇りを持ちたいものです。

先輩の教え

安倍 啓司 (前 八幡小学校)

地区歩きをしていないことを口実に管理職試験から逃げていた私を校長室に呼びつけ、「受験資格をもらってきたから、ここで書け。」と採用願書を手渡したI校長先生。繰り返し言われた言葉が忘れられません。「管理職は自分のためになるのではない。誰かが先生方を守ってやらなければならない。出世したなどと馬鹿な考えをもってはいけない。」

私は管理職としてどれほど先生方の役に立てただろう。どれだけの後輩を育てられただろう。教育に対する情熱にあふれ、時に厳しく切磋琢磨し合う職

場を目指してきたつもりだが……。

退職する先輩方はしばしば、「私はいいい時に辞める。これからの人は大変だねえ。」と言われました。

そう言われた後輩の校長も同じ事を言って辞めていきました。「これから大変な時代」と言われつつも、私たち校長はみんなそれを当たり前のよう乗り越えてきたのです。だから自分が辞める時、「自分たちの時代は良かった」という言い方をするのでしょうか。いつの時代も私たち校長には難局を乗り越えるだけの資質と仲間がいるということです。後輩の皆さん、世の流行や風評に惑わされず、自信を持って、子供たちのために学校経営に当たってください。仙台の校長会の結束と連携は日本一です。

先輩と職場の仲間に支えられて

熊谷 和裕 (前 向山小学校)

退職する3月、最後になる復興プロジェクトの集会で、子供たちに次のような話をしました。

2年前に大川小学校に行って黙とうをささげたこと、そのときの小学生は、命を落とすことがなければ中学2年生から高校・大学生になっているはずであること。みんなと同じようにたくさんのことを学び、たくさん楽しい時間を過ごしたかであろうこと、だから今ある命を一人一人大切にしたいこと。

震災を知らない子供たちに、その出来事と人々の苦労と教訓を、困難を乗り越えていく力をどう伝え続けていくかということが今後の大きな課題であると思います。心に響く指導の継続が望まれます。

思えば震災の春の校長昇任でした。避難所対応は終えたものの、復旧に向けて課題山積の中での異動でした。そして着任直後の大きな余震、どうなることかと思いつつも、何とか目の前の課題を解決していったのは、先輩の校長先生方の的確な御助言と励ましのおかげでした。また、職場の仲間の結束と保護者や地域の方々のバックアップが、度々訪れる学校経営の危機を救ってくれました。

学校現場は常に課題山積ですが、校長会の結束力と同僚性を生かし、皆様がますます御活躍下さることを祈念しております。長い間ありがとうございました。

「不易と流行」

丹野 富雄 (前 岩切小学校)

「教育課程を通して、これからの時代に求められる教育を実現していくためには、よりよい学校教育を通してよりよい社会を創るという理念を学校と社会とが共有し、それぞれの学校において、必要な学習内容をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかを教育課程において明確にしながら、社会との連携及び協働によりその実現を図っていくという、社会に開かれた教育課程の実現が重要となる。」

(新学習指導要領／前文より引用)

さて、ほぼ10年ごとに見直されてきた学習指導要領では、その都度新しいもの(流行)が出されてきました。時に「生活科」「総合的な学習の時間」……、今は「特別の教科道徳」「外国語活動」です。

ところで、教育における(不易)とは何でしょうか。その一つは、これまでの伝統的な教育でしょう。例えば、一斉学習の技術、規範意識などではないでしょうか。

校長として、地域とともに歩む学校教育を推進する上で重要なことは、それぞれの学校の実態に即した「不易と流行」は何なのかを見極め、校長として、その理念や方針を具体化することだと思います。

「感謝」

佐々 孝 (前 高砂小学校)

高砂小学校の校長として3年間充実した毎日を送ることができました。退職するに当たって、満足した気持ちです。

どの学校も同様でしょうが、本校も突発的な問題が発生してきました。数か月にも渡る事案もありました。そうしたときこそ、校長の出番だと思い、全力で対応をしてきました。困った事態が起きたときほど、わくわくしていました。危機管理がしっかりできることが校長としての最低条件だと思います。

その上で、校長の仕事として、一番大事なことは夢を描くことです。職員に校長の願いや思いについて説得力を持って語り、共有することが肝心であることも強く実感してきました。夢を語り形にしていく指導力を発揮できることは、校長としてのだいご味でした。一緒に働いてくれた職員に感謝です。

校長と地域との結び付きが強くなればなるほど、地域からの支援がたくさん得られるようになることをひしひしと感じてきました。地域と学校とが結束するためであれば、休日も喜んで地域に飛び込んでいきました。地域あつての学校でした。

校長の仕事は実にやりがいがありました。職員・保護者・地域等々、多くの支えがあって成り立つ仕事でもありました。感謝の念で退職できることをうれしく思います。

ありがとうの言葉にのせて

梅原 隆司 (前 東仙台小学校)

教員生活最後の卒業文集に、「ありがとう」という感謝の言葉についての思いをつづりました。その語源・由来とともに、今あることが当たり前のことではないことを、声を失い体も思うように動かせない重いハンディを負った仙台在住の詩人の話とあわせて伝えました。自分の思いや考えを声や文字で表せることが、実はとても貴重ですばらしいことだと気付いてほしかったのです。それまでも、特に大震災後は、命のつながりの中で何げない日常を送っていただけることのありがたさを感じ、そのことを日頃から児童に語っていました。

私自身も退職を迎え、たくさんの教員の中、校長という立場を担う機会を得ることができましたことに、「ありがとうございました」と感謝の言葉を申し述べるほかありません。また、在職中には校長会の皆様や市教委事務局の皆様が大変お世話になりました。今顧みるに、子供がいるから、教育に真摯に取り組む先生方がいるから学校が成り立ち、保護者や地域、多くの方々からの支援があったからこそ校長として振る舞うことができたと思えるところです。

最後に、課題が累積する現場において日々精励されておられる校長先生方のますますの御活躍と、無事に職責を全うされますことを御祈念申し上げます。

これからも、地域とともに

小熊 信治 (前 荒巻小学校)

震災から7年。復興に向けて、子供たちに是非身に付けさせたいと思って取り組んできたのが、地域と連携した起業教育です。未来を切り開き、たくま

しく生きる力を育てることをねらいとしています。

本校では、3年前から、高学年の総合的な学習の時間に「荒巻元気アップ作戦」を行ってきました。5年生は、地域の商店を取材し、その商店の特徴を表現した応援ポスターを作ります。コピーライターさんやデザイナーさんから指導を受けて制作しています。6年生は、「Weラブ荒巻」のイベントを開催し、荒巻の商店を訪ねていただくシールラリーを行いました。「初めて地元のお店に入りました。」と話される方々もいて、商品が売り切れる店まで出る盛況ぶりでした。

地域コミュニティにおける関係の希薄化が叫ばれる昨今ですが、そんな時代だからこそ、地域の方々のお力をお借りし、地域で学ぶ教育活動を積極的に行い、地元愛を育んだり、チャレンジ精神や実践力を伸ばしたりする学習は大切だと思います。「地域とともに歩む学校」仙台市がその言葉を掲げて9年になります。今後も地域と連携した様々な教育活動が行われることを期待します。6年間の校長生活でしたが、皆様には、大変お世話になりました。ありがとうございました。

「笑顔ある学校」のために

畠山 厚子 (前 鶴谷東小学校)

無事、38年間の教職生活にピリオドを打つことができました。38年間はあっという間でしたが、新任の時はガリ版で指導案を書いていたことを思い出し、ワープロ、パソコンと変化をたどった年月に、科学技術の進歩の速さを改めて感じています。

2校の校長になり、児童の「安全・安心」に最も心掛けて学校経営を行いました。この「安全・安心」には子供同士や家庭内でのトラブルももちろん含みます。ちょっとした変化にも気付くよう校門に立って子供の様子を見たり、変わったことがないか毎日校舎内を巡視したりしながら、いじめ防止や不安感のある児童を見逃さないよう早期発見に努めました。また、保護者や地域の方々との連携も子供の「安心・安全」には欠かせない大切なものです。

Jアラートの避難訓練は、鶴谷東小が市内で一番早かったのではないのでしょうか。市教委から通知が来る前に、授業中と休み時間を想定して避難訓練を2回実施しました。常に万が一のことを考え、先々と進めることが予防となり、子供たちが楽しく生活できる学校になると思います。

時代が進んでも、子供たちの純粋な気持ちや屈託のない笑顔は変わりません。どの学校も子供一人一人が明るく元気に過ごすことができる学校であってほしいと願っています。

教室から

大江 広夫 (前 大野田小学校)

当たり前と思っていた日常があの時(東日本大震災)ほどかけがえのないものであると実感できたのは生まれて初めてだったように思います。

いい塩梅の歳になってから、そう考えるようではいささか遅過ぎるのでしょう。もっと若い時分から日々を生きるということに、慈しみとおおらかさを持って向き合ってくるべきだったのだと気付かされた大きな出来事でした。

教室から聞こえてくる子供たちと先生の笑い合う声。なんと心地よく、微笑ましく響いてくることでしょう。穏やかにリズムよく進んでいく学習に、どの子も目をキラキラさせて取り組んでいます。教室からこぼれてくる子供たちの笑顔に、また教師も励まされ勇気をもらっているのでしょう。毎日のこんなやり取りの中で教育活動は営まれているのだと、改めて考えるようになりました。

将来の社会を見据えた教育改革は、待たなしで進んでいきます。現場の取組と対応にも、確かに効果的な実践が求められてくることでしょう。先生方が子供たち一人一人と丁寧に語り合い、それぞれの思いを真摯に受け止め応えようとしていることに自信と誇りを持ってほしいと思います。

学校はいつまでも、子供たちにとって楽しく、自分の夢を描ける場所だと思っています。

大震災から校長として考えていること

吉川 隆雄 (前 沖野小学校)

「皆、大丈夫か？すぐ校庭へ出なさい。」

2011年(平成23年)3月11日(金)午後2時46分、太白区では震度5強の大地震が秋保地区の湯元小学校を襲った。地震の揺れが長く続いたので、校舎2階の2年の教室は、天井から蛍光灯が外れて落ちて割れ、天井の板や廻縁も落ちてきた。机の下に潜って隠れている子供たちは、地震がなかなか止まないので、全員が泣きながら必死になって地震に耐え続けていた。岩盤が硬いとされる秋保でさえそのよう

な状況だった。

地震が収まった後の第一声が、冒頭の子供たちへの校長先生の指示である。当時教頭たる私自身は、校舎2階へ駆けつけたものの、何も言うことができず、全体への指示は校長先生から遅れてしまった。このことへの後悔がその後校長になっても、常に付きまとっているのである。もし大地震が来たら、当時の湯元小の校長先生のように、明確な指示が子供たちに迅速に出せるだろうか。

どこの学校でも、対地震の避難訓練をしているし、大地震や津波想定地域総合防災訓練を実施して、万が一に備えているのは言うまでもない。

しかし、子供たちの命と身の安全を守るために、校長はその時、その場で全体に、的確な指示を瞬時に出せるか、常に考えていることが肝要だと思う。

校長室のグローブ

高橋 克仁 (前 古城小学校)

校長になった年から、私は、校長室の机の近くに野球のグローブを置いていた。これは、私が初任給で買ったものだ。

初任教時代の私は、とにかく授業が下手だった。ヨウ素液を希釈せずに実験で使ったため、青紫色になるはずのヨウ素デンプン反応が真っ黒になってしまふなど、失敗は数え切れない。

それでも誇れることが一つだけある。それは、休み時間に放課後に、子供とたくさん遊んだことだ。休み時間はドッジボールにサッカーに鉄棒、縄跳びなど、放課後は野球をして遊んだ。そのうち保護者が立ち上がり、野球のスポーツ少年団が結成された。

教師として未熟で恥ずかしい限りの初任教時代だったが、約25年経って当時の教え子たちと会う機会があった。立派に成長した教え子たちに会い、うれしく思った。中には「先生がいてくれたから今の自分がある」と言ってくれた教え子もいた。

未熟な教師にも一生懸命ついてきてくれた子供たち。育てられたのは、私の方であることに気付かされた。

初心忘るべからず、情熱を持って誠心誠意仕事をする事、いつも子供のそばに居ること……。校長室のグローブは、いつもそのことを私に語りかけてくれていた。

「震災」でのつながりに縁を感じ

丹治 重廣 (前 蒲町小学校)

6年前、私が、校長として初めて入った校長室は、仮設校舎の将監小校長室でした。その年度中には、元の校舎に戻れるということで、大変だった時期は過ぎていましたが、その年は何度も大雨になり、その度に雨漏り対応のため夜中まで、時には泊り込んでの点検・見守り。でも、あまり大変とは思わず、何事も経験と取り組みました。鉄筋の校舎に戻ることができた時は、喜びを子供たち、地域・保護者の皆様と分かち合うことができました。そして、4年後、蒲町小に異動。蒲町は将監と違って4年間仮設校舎で暮らし、27年度に新校舎に移ったばかりでした。震災の影響を強く受けた学校で、最初に送り出した卒業生は、小学校6年のうち4年、制約のある生活を強いられていた子供たちでしたが、明るく元気に巣立っていきました。

私の校長としての歴史はこの6年です。被災2校を経験しても、「風化」の危機感を強く持っています。さらに何事もなかったかのように子供たちは元気に生活していますが、阪神淡路の教訓、数年後の変化の予兆を感じています。縁があって震災の影響で建替えられた南光台市民センターで4月からお世話になります。なかなか経験できない経験を生かして、今後も、震災と向き合っていきたいと思います。皆様も、忘れずに、伝え、そして生かしていきましょう！

「魔法の笑顔」

眞壁 淳一 (前 広瀬小学校)

「あなたに逢えてほんとうによかった。うれしくて、うれしくて言葉にできない。」～小田和正さんの詩には強い力とすべてを包み込む温かさが感じられます。そんな人間になってみたい！。最終決断者としてつらいこともあります。共に生きる仲間を信じ、夢を持って共に行動し、目の前の問題を乗り越え、遠くに見えるゴールを目指すのみですね！。しかめっ面でいるよりは、努めて笑顔を注ぎたいと思います。何かいいことに出会える予感がします。～笑顔による10の効力～

- 1 元手がいない、しかも利益はばく大。
- 2 与えても減らず、与えられた者は豊かになる。

- 3 一瞬でもその記憶は永久に続くことがある。
- 4 どんな金持ちでもこれなしでは暮らせない。
- 5 どんな貧乏人もこれによって豊かになる。
- 6 笑顔は家庭に幸福を、仕事に意欲をもたらす。
- 7 疲れた者には休養を、失意の者には光明を。
- 8 悲しむ者には太陽、悩める者には自然の解毒剤。
- 9 買うことも、強要することも、盗むこともできない宝物。
- 10 無償で与えて、初めて値打ちが出る

「出典 D.カーネギー」

健康に御留意なさり、ますますの御活躍を祈念しております。

人と人をつなぐ

高橋 文子 (前 上愛子小学校)

2030年には、日本の労働人口の約49%が人工知能に代替可能になるというニュースが取り沙汰されています。小学校の教師はどうかというと人間関係を学ぶ分野なので残る可能性が高い職業だそうです。

小学校では、教師と児童、児童相互の人間関係を深めながら教育活動を展開する中で、児童の人間としての調和のとれた育成を目指しているため、その要としての教師の役割は大きいと言えます。

外国語や道徳科の新設やプログラミング学習等、新学習指導要領実施に向けてますます現場は、忙しく緊張感も高まっていることと思います。しかし、学校は、教職員の個の力と「チーム〇〇小」の力で厳しい状況でも前に進んでいけると思っています。それは、東日本大震災の時、避難所運営をしながらも、学校再開に向けて抜群の「個人力とチーム力」を発揮したそれぞれの学校の力があるからです。

校長先生には、それぞれの学校の「個人力とチーム力」のリーダーとして、思う存分力を発揮していただきたいと思います。教職員の頑張りには、児童にとって生きた教材になり、人間として調和のとれた育成に大いに役立つはずで。

最後になりましたが、仙台市小学校長会へ感謝・御礼とともに、ますますの御発展と会員の皆様の御健勝、御活躍を心よりお祈りいたします。

子供と向き合う時間を大切に

石山 芳毅 (前 川前小学校)

東日本大震災の時、当時幸町小学校の教頭であった私は、1か月以上に及ぶ避難所運営に地域の方々と共に携わることになるのであるが、その時避難所の世話を手伝ってくれたのが、10年以上前に勤めていた幸町南小学校の教え子たちだった。教え子たちのその成長ぶりに驚きと感激でいっぱいだったことを今でも昨日のこのように思い出す。

今どこの地域でも、町内会や子供会などの未加入者が増えている。次の世代の世話役がいればかりか、地域で子供を指導することさえちゅうちょするとよく耳にする。当然のように土日にあったトラブルもすぐに学校に寄せられる。子供だけでなく大人も人との関わり方がだいぶ下手になっているのではないか。そこで校長先生方をお願いしたいのは、せめて学校では子供たちとじっくりと向き合う時間を何とかして作っていただきたい。たわいのない話を聞くだけでいいし、時には一緒に遊んでやってほしい。時数の関係で運動会や学習発表会をやめてしまおうという話も出ているが、学校行事だからこそ育つ力もある。忙しいのは百も承知であるが、これ以上子供同士が関わり合う場を奪わないでほしい。授業時数に追われるのではなく、子供と過ごす時間に追われてほしい。学校は学力以上に人と人とが関わり合う生きる力を育てる大切な場所であるのだから。

改めて皆様に感謝

玉手 克彦 (前 大倉小学校)

教員として退職まで小学校9校に勤務し、大倉小を最後に38年間の教職を終えることになりました。今、教員生活を振り返ってみると、勤務したそれぞれの学校のなつかしい思い出が、次々と駆け巡ってきます。教え子たちの笑顔が目には浮かび、心温かな保護者や地域の方々、そして先輩方をはじめ教職員に支えられていたことを改めて痛感しております。それぞれの勤務地で多くの人たちに支えられ助けられて、38年間仕事をやってこられたのだと改めて感じました。最後に勤務した大倉小では、校長として本当に充実した日々を送ることができました。児童が17名の小規模校ですが、子供たち一人一人元気でたくましく、そして、いろいろなことに挑戦して力

を発揮する子供たちでした。職員や保護者、地域の方々に支えられながら、地域とともに歩む学校づくりを進めることができました。仙台市小学校長会では、多くの校長先生方にお世話になりました。校長として最後まで職責を果たすことができたのも、校長会の力強いチームワークに支えられたお陰と感謝いたしております。教育現場は今後も大変だとは思いますが、皆様方におかれましては、今後ともすばらしいお力で、仙台市の教育の充実・発展に御尽力くださいますよう祈念いたしております。ありがとうございました。

地域の方と手を携えて

渡辺 美枝 (前 野村小学校)

野村小の学校経営者として着任したとき、それは東日本大震災から3年が過ぎたときでした。野村小の地域は、ライフラインに大きな不便を感じることもなかったようで、震災に対する思いは、他地区の方々との温度差があったことは否めませんでした。

3月11日が訪れるたびに、また避難訓練や開校記念日の際に、東日本大震災や野村小の校舎が崩れてしまった宮城県沖地震の話をし、自分たちにどんなことができるのかを考えさせてきました。

一方では、台風による避難所運営を余儀なくされる事態が毎年起こりました。泥だらけで避難して来た方を受け入れたときに初めて、地震でもない、火災でもない、野村小として新たな危機管理の必要が迫られていることを痛切に感じました。学校に避難してきた方を畳のあるコミセンに受け入れてくれた町内会長に地域の温かさを感じました。防災訓練は児童がやれることを増やしていくために行うのが一番だと語る防災リーダーの信念に心を打たれました。校長として、地域との連携の大切さを改めて実感したのもそのようなときです。

地域のために、社会のために、役立つ力を育てるべく、強く地域と手を携えること。情報交換し、協力すること。やはり、あたり前のことながら最も重要なことであると信じています。



あたりまえをあたりまえに

松本 清一 (前 将監中央小学)

学校経営を常に前向きに「あたりまえのことをあたりまえに」 気負うな! 気取るな!

「なるようにしかならない!でもそこをなるようにするのが校長」すべては「忍」

「東日本大震災から学んだこと」

山田 洋一 (前 八乙女小学校)

千年に一度といわれる未曾有の被害をもたらした東日本大震災が学校を襲ったことは記憶に新しい。

当時教頭であった私はマニュアルどおり児童の引渡しを完了し、急いで避難所である体育館に駆けた。体育館は真っ暗であったが、発電機からの照明がこうこうと灯り、フロアには整然と避難住民が座っていた。校長は私の顔を見るなり「私が話しましょう。」と言い、ハンドマイクを握り避難所の状況やお願いを語り始めたのであった。

東日本大震災から学んだことは、マニュアルの整備とともに、校長の臨機応変な対応やリーダーシップの大切さである。その時々、状況を的確に判断し、どうするか方向性や具体策を示し、物事を前に進めるのが校長の責務だと痛感した。

また、学校や地域が一丸となって避難所運営に関わる中で、人とのつながりや地域との連携、学校への信頼が深まった。お陰さまで、この震災での絆を原動力として、中学校区学びの連携や地域連携をスタートすることができた。改めて、地域やPTAとの交流やコミュニケーションの大切さを再認識した。

学校を取り巻く環境が厳しさを増していく今日、皆様方には、健康に留意され、子供たちのための教育を一層推進される事を期待します。

つながる、広がる ~そして夢を未来へ

石原 恵一 (前 南中山小学校)

この南中山地区は大きな被害はなかったものの、7年前に東日本大震災を経験して、地域の人たちは地域と学校の深い結びつき「つながり」が大切であると実感しています。昭和60年4月泉市立南中山小学校として誕生し、昭和63年に仙台市立南中山小学校となり、今に至る歴史の中で、様々な「つながり」

が生まれました。PTAとのつながり、地域のつながり、多くの団体がつながり、そうした「つながり」から子供たちの応援団として南中山小学校を支えるすばらしい教育環境が醸成されてきました。

この伝統を踏まえ、この3年間、「つながる・広がる・そして夢を未来へ」をスローガンに学校運営を進めてきました。学校と地域の融合を図り、学校支援地域本部事業を根幹に据え、地域を人たちに教育活動参加型の連携を図る地域交流室の構想が「広がり」、運用が開始されます。

また、縦の「つながり」として小中学校の学びの連携も大切であると考えて、義務教育9年間を通して未来を生き抜く力を身に付けられたらと南中山中学校区の学びの連携事業も軌道に乗ってきました。

卒業生も今年度まで3,151人を輩出してきました。社会の第一線で活躍する人材となり、日本各地へと羽ばたいています。こうした広がりが未来永ごうに続くことを願っています。

明けない夜はない!

高橋 純子 (前 長町南小学校)

5年間の校長生活の支えとなったのは、やはり七郷小学校で経験した東日本大震災の経験でした。

3月11日の夜は、荒浜で被災した方々を含めて2,000人を超える人たちが、体育館や教室に入りきらず廊下にまであふれていました。学校に来た方々の休む場所を確保し、ろうそくを灯し、不安な一夜を過ごしました。あの時、Y校長は周りに頼ることもできず、様々なことを一人で決断せざるを得ない状況でした。生死を分けた最前線にあった学校だったので、被災した人たちの食事のこと、寒さをしのぐ方法、次々に来る安否の問い合わせへの対応。子供たちのことや教職員のことを考え、卒業式や学校再開のことまでも考えなければならなかったあの時のY校長の苦悩はいかばかりであったかと、今思い返しても図り知れないものがあります。

でもあの時、Y校長の指示の下、職員がチーム一丸となって対応しました。その時リーダーシップをとってくださったY校長の姿は、今でも私の脳裏に焼き付いており、心の支えとなっています。

これからの学校経営には、様々な課題が突き付けられています。一つ一つ着実に乗り越えていかなければなりません。どんな困難なことでも、チームとして取り組めば、必ず解決への道は開けます。明け

ない夜はありません。あの日、夜が明けたように。

管理職を志した訳

石若 雄弘(前 西山小学校)

今でいうフレ研時代に、私には重い病を持つ娘がいました。妻の実家近くの病院にいましたので、毎週土日には新幹線で病状を見に行っていました。

さらに学級を空けることも多く、手術の日が参観日や懇談会と重なると別日に設定していただくこともありました。この日々が長くに及び、管理職の方々や多くの先生方に多大な迷惑を掛け、心苦しい毎日でした。

そのような折、容態が急変し、緊急に呼び出された時、私は、「これ以上迷惑を掛けては。」と、行くことをためらっていました。その様子を察してか、当時の教頭から「いいから早く行きなさい。後のことは何とかするから。」「申し訳ないという気持ちがあるなら、次の人たち(後進)にその恩を返しなさい。」と。私はその言葉に元気付けられました。娘は亡くなりましたが、いつの日かこのような言葉を掛けられる管理職になろうと心に決め、今に至りました。私は、今までその恩を返すため、職員室の先生方に未だ返しきれませんが、その心を幾ばくか返してきたつもりです。

互いを思いやる心温かい職場から最強の組織力が生まれ、それは子供に保護者に地域に還ります。

これからも皆様には、職員室が互いの心配事を分かち合い助け合う場となれるよう御尽力くださることを願い、私の挨拶とさせていただきます。

「生き方教育」で未来を拓く子供に

高橋 隆子(前 桂小学校)

未曾有の悲劇をもたらした大震災から半年後、市教研国語部会は、例年どおりに作文宮城編集のための作品を募集した。がれきの撤去に始まる復旧・再生に向けた懸命な努力が続く中であって、県内から寄せられた作品は、震災体験をつづったものであふれていた。そして、審査にあたった教師は、鉛筆でつづられた文字を一つ一つたどりながら、涙して読んだ。私もその一人である。重すぎる体験や苦しさの中にありながらも、事実をまっすぐに受け止め、顔を上げて自分の力で歩み出そうとする子供たちの姿に「子供はすごい。無慈悲な力に屈せず、未来を

見つめている。生き抜こうとする真の力を持っている。」私は被災した子供たちから「強く生きる」というメッセージを受け取った。

心結ぶ未来社会を構築するためには、全ての子供たちがそれぞれに手を取り合い支え合っていく必要がある。そこで私は、「セーフティのあるコミュニティづくり」が学校教育の責務であるという信念を持ち、子供一人一人の思考力・想像力を培い、異なる考えを安心して分かち合える関係づくりをとおして、自己の生き方について考える「生き方教育」を学校経営に取り入れてきた。心豊かにたくましく生きる子供を育てる教育こそが、震災の教訓を生かし、未来を拓く道につながると信じている。

「初心」

星 俊行(前 愛子小学校)

民間企業から転職して、28歳で新任としてスタートした32年間の教員生活でした。今、教員になって本当によかったと思いながら退職できる自分は幸せだなと心から思っております。初めて担任した4年生の子供たちとは今でも時々会う機会があり、退職の日、新任校の校門でその子たち(と言っても現在42歳)と会い、何げない会話の中に32年間の時の流れを感じました。新任の時の校長から「初心忘れるべからず」と書かれた紙をいただきました。子供たちと共に時間を過ごせるだけでもうれしいと思い、その子たちが喜ぶ姿を見たくて頑張った新任時代でした。その時の初心は「子供のために自分ができることを全力で頑張ろう」でした。今、校長として何かを判断しなければならぬ時、「何が、どちらが、子供たちにとってためになるのか」が常に基準になっていました。

退職を前にした卒業式の日、高熱で休んだ3名の卒業生がおりました。その子たちのためにできることはないか相談し、4日後に3名だけの卒業式を体育館で行いました。呼び掛けに応じてくれてサプライズでほとんどの卒業生、5年生の合唱の参加、3年生の花のアーチとすばらしい思い出に残る卒業式ができました。

出会ったたくさんの子供たち、先生方、保護者の方々、地域の方々に心から感謝いたします。

新任校長所感

学校経営に寄せる思い



明日も来たいと思える学校を目指して

小野 雄一 (鶴谷東小学校)

私は、鶴谷東小学校206名の子供たちが、明日も来たいと思える学校づくりを目指しています。

新しい知識を得る楽しさや友達と遊ぶ楽しさ等々、日々感じる達成感や充実感などのポジティブな体験を積み重ねることで、学校は、子供たちにとって魅力あるところになっていくのだと信じています。

魅力ある学校を目指す上で、家庭や地域との連携を抜きにしては考えられません。様々な知恵や技を持つ保護者や地域の方々との触れ合いは、子供たちに、より深い学びの機会を与えてくださいます。鶴谷東小では、PTAや地域の諸団体が協力し合い、様々な活動で学校を支援して下さるのが開校以来の伝統だそうです。本当にありがたいことです。それに対して、学校がお返しできることは何だろうと考えてみると、子供たちの明るい笑顔とさわやかな挨拶、そんな元気いっぱいの姿を見ていただくことしかありません。だからこそ、子供たちが日々笑顔で学校生活を送り、「明日も来たいと思える学校」であることが、とても大切だと考えています。

地域とともに

及川 俊 (旭丘小学校)

旭丘小は、昨年度50周年行事を行い、地域の皆様からたくさんのお支援、御協力をいただきました。人が替わっても素晴らしい伝統は、地域を始めとする方々の熱意に支えられ、さらに、創造、発展、充実していくことと思います。本校は、平成16年度に地域の方の呼び掛けで結成した「子どもを守り隊」の方々に、子供たちの登下校の安全を毎日見守っていただいています。今では、安全安心な学校づくりの一翼を担うかけがえのない大きな存在となっています。

新任校長として3か月近く経ちました。何もでき

ない新米校長ですが、自分にできることは、これくらいと思い、朝は守り隊の皆様にあいさつをして回り、子供たちを校門で迎えています。旭丘小在任中は、毎日続けたいと思います。これからも、保護者や地域の皆様の御支援・御協力をいただき、安全安心な学校づくりに努めていきたいと考えています。

自分自身に問いかける

駒沢 健二 (遠見塚小学校)

「学校の目の前に大きな古墳がそびえ、桜のきれいな学校」というのが遠見塚小学校へ着任するまでの印象です。その印象どおり、着任の初日には、早めに咲き始めた桜と目の前で見るとなおさら見事な前方後円墳が私を出迎えてくれました。しっかり頑張らなければと身の引き締まる思いで校門をくぐりました。

校長は、リーダーシップを発揮し、独自性を生かしながら学校組織をマネジメントし、教育活動の充実を目指さなければならないものと心に言い聞かせています。そのためにも、自分自身の目で捉えた学校課題解決や、学校がこれから期待される社会の要請への対応に向けたビジョンを示して進まなければならないと考えています。しかしながら、私にはまだその力量が足りません。先生方の声に耳を傾け、自らがしっかりと研修し、先輩方の教を大切に進んでいかなければならないと思っています。

子供たちに教職員。保護者の皆様に地域の方々。学校を取り巻くすべてのものを大切に、感謝の気持ちを忘れずに精進していく所存です。

一人一人の思いを大切にする
風通しの良い職場環境を目指して

黒田 章博 (広瀬小学校)

20数年前、教諭として勤務した学校に校長として着任し、3か月が経過しました。校舎から望む蕃山の景観は変わりませんが、これまで長く取り組んできた生活・総合の実践の成果が大いにうかがえ、新た

な広瀬小学校という印象を受けております。

本校では今年度始めの異動が比較的多かったのですが、以前からいる教職員がこれまで培ってきた指導法等を、努力と工夫を惜しまずに伝えようとする様子が随所に見られ、非常に感銘を受けております。

今から7年前の震災の折、当時勤務していた学校で3週間にわたる避難所運営を経験しました。教職員が一致団結して取り組んだつもりでしたが、後日思いを語り合った際、それぞれが不安や不満、不公平感を感じ悩んでいたことを知りました。

日々の教育活動を行っていく上で、教職員が同じ方向を向き「子供たちのために」という思いを持つことが大切だと考えます。そのためにも、一人一人の不安や不満、不公平感を解消できるよう風通しの良い職場環境にしていきたいと強く感じております。

笑顔とともに

中辻 正樹 (高砂小学校)

校長室から見える休み時間の校庭からは、日々子供たちの歓声が聞こえてきます。静かに何かを話したくて校長室に来る子供たちもいます。一人一人の子供たちの様々な表情に安心したり声掛けしたりしている毎日です。

本校は「地域とともに育む学校」を目指しています。地域の方々からの御協力・御支援をいただきながら、子供たちは毎日を明るく元気に過ごしています。登校時の不安な気持ちを支えてくださったり、「かけこみ110番の家」の御紹介をいただいたり、地域の方々に温かく見守られながら子供たちは安心して学校生活を送っています。

七北田川を挟んで東西に広がる本校学区には、多様な自然環境と数多くの施設があります。それらもまた子供たちを育ててくれる大きな支えとなっています。子供たちは、地域で学び地域に学びます。そして地域とともに子供たちを育む学校があります。それが高砂小学校です。地域に感謝しつつ学校経営に取り組んでまいります。これからも笑顔とともに。

地域と職員に恵まれて

伊藤 雅亮 (鹿野小学校)

4月2日に着任するとすぐに、地域の方が学区をすべて案内してくださり、必要なところには、一緒に行ってください御挨拶をさせていただきました。

このときに、なんてすてきな地域なのだろうと感動しました。さらに、地域にはPTAをはじめ、学校

の応援団となる組織がいくつもあることにも驚きました。また、若い職員が多いのですが、協力し合っ、て、よりよい教育活動をしようという姿勢が強く感じられ、頼もしい限りです。

このような鹿野小学校では、校長には学校として児童をどのように支援して学力や社会性をどのように身に付けさせていくかの方向性を明示し、教職員がその方向性を理解して目標を達成させることができるように、報告・連絡・相談を求め、それで得た情報をもとにした後方支援ができることが何よりも強く求められていると感じます。

このような重責の校長職を精一杯務めていこうと着任して2か月余りが経過した今、改めて決意しています。

地域とともにある学校を目指して

加茂 伸一 (実沢小学校)

実沢小学校は、長い歴史と伝統を持ち、自然豊かな田園地帯にある学校です。

児童数14名と小規模な学校ですが、皆仲が良く、本校が掲げてきたスローガン「小さな学校 大きな家族 チーム実沢」そのものです

地域の皆様の学校に対する思いは強く、またとても協力的です。運動会では当日ばかりでなく校庭の整備等にも多くの方々に参加していただきました。

この学校に着任して職員室で最初に目にしたのは「和以爲貴」と書かれた書でした。忘れてはならない言葉だと思いました。

子供たちや保護者、地域そして学校。本校の現状を見ると、この皆様の力をお借りし「チーム実沢」として互いに心を開いて意見を出し合い、互いに尊重し合っ、てよりよい学校に育てていくことが何よりも大切なことであると考え学校経営を進めていく決意をいたしました。

それが、どんな時にも子供たちが安心して伸びやかに活動し、成長を続けていける地域となっていくものと信じて取り組んでいく所存です。

あたり前に過ごせることのありがたさ

八島 雅人 (小松島小学校)

東日本大震災の際に感じた、日常のありがたさを思い出したのは、ある施設訪問がきっかけでした。

私達教員が訪問すると、在校生も卒業生も、目を輝かせて近寄ったり照れくさそうに話したりしました。どうやら楽しみに待っていたようです。

施設スタッフとの情報交換では、学校では見られない様子に驚いたり、ホロリとしたり、感心したりと、児童理解を深めました。そして、改めて「あたり前」に過ごせるありがたさを思い出した次第です。

本校では協働型学校評価に「相手や場に応じた挨拶をしよう」を掲げています。まずコミュニケーションの基礎となる挨拶が「あたり前」にできるよう大人が率先して挨拶を行い、地域全体で児童を育てようと考えました。先日、挨拶の言葉があまり返ってこない児童に「大切にしているよ」という思いを込め、名前を呼んで挨拶したところ、笑顔で挨拶が返ってきました。大切にしたい出来事でした。

お互いが認め合える社会の中で、「あたり前」にできる力を育てていきたいと感じているところです。

優しさの輪

堤 由美 (上愛子小学校)

「本当に香川選手がこの上愛子小に来たんだなと思ひ、びっくりしました。私も、これから色々なことに挑戦したいと思ひます。」

2年前、本校に来校した香川選手にサッカーを教えてもらった子が、ワールドカップの試合を観た翌日に言っていました。

学校の周囲は美しい自然にあふれ、子供たちがすくすくと育つ環境が整っています。縦割り活動がとて活発で、高学年が下学年に優しくアドバイスをしながら、花壇の花の苗植えや、「ふるさと歩け歩け遠足」を実施しています。

子供たちの優しさの輪は保護者や地域の方々にも広がり、創立139年の学校を常に支えてくださる姿が見られ、子供たちが様々な体験をする機会につながっています。

いろいろなことに挑戦したいと話してくれた子供の言葉を胸に、将来へ向けての期待を持つことの大切さを伝えながら、保護者や地域の方々との連携がさらに充実したものになるよう、学校経営に取り組んでいきます。

子供たちの笑顔が輝く 学(楽)校を目指して

高橋 伸二 (人來田小学校)

太白山の麓の自然豊かな地域に位置する人來田小学校。たくさんの方に見守られながら、明るく素直な子供たちに育っています。

朝、登校してくる子供たちは、通学路で出会う地域の方に「おはようございます」と笑顔で挨拶をし

ています。横断歩道を渡り終えると、止まってくれたドライバーや交通指導で立っているボランティアの方に深々とお辞儀をする子をたくさん見掛けます。地域の方やお客様からも「子供たちの挨拶が素晴らしいですね。」とお褒めの言葉をいただきます。

これは、各家庭での声掛けや励まし、そして、日頃から子供たちを見守ってくださる地域の皆様の温かい関わりのおかげだと感じています。

今年度は「一人一人の笑顔が輝き つながる楽校をつくらう」を合い言葉に学校全体で活動しています。家庭と地域の皆様の御協力をいただきながら、子供たちが安全な環境の中、笑顔で楽しく学校生活を送ることができるように、職員が一丸となって取り組んでいく学校づくりを進めていきたいと考えています。

桜のエールを受けて

大森 喜美子 (川前小学校)

川前小学校の桜並木は、すばらしいという言葉に尽きます。4月9日満開の桜の下で子供たちとの出会いを迎えることができました。「頑張っ。しっかり！あまり力まないでね！」と、私にエールを送ってくれているかのように思えました。明治7年芋沢小学校川前分校として創立した本校は、今年479名の児童が学ぶ学舎となりました。自然豊かで、里山での学習や野鳥の観察、田畑での学習など、この地ならではの行事があります。講師の先生は、地域の方々です。いつも子供たちのことを一番に考え、温かく見守りお世話して下さいます。子供たちの素直さ・純朴さ・屈託のない笑顔は、川前小学校が一番だと断言できます。「笑顔あふれる学校をめざして」、一(か)んがえよう 二(わ)かりあおう 三(ま)えむきに取り組もう一 (か)わ(ま)えが合言葉です。一人一人が笑顔で学校生活を送れるように、家庭、地域の皆様方と協力連携し合いながら、学校経営に当たっていきます。今、緑の葉で覆われた桜の木に目を向けながら新たな勇気が湧いてきました。

未来を創る仕事

齋藤 敦子 (中山小学校)

着任早々、中山小学校の歴史を振り返りました。6月に開校50周年記念行事が控えていたからです。開校当初の本校は、山の上にぽつんと建っており、校庭には石がごろごろして、走ることもままならない様子で、現在の姿からは想像もつきません。

様々な資料を読み進めていくうちに、式典ではこの中山小学校の原点を子供たちに伝えたいと思いました。この学校の行く末を見届けることができる子供たち。今の6年生は、100周年のときに62歳、1年生は56歳。子供たちが、記念すべき年に在校したことを幸運に思えるように、中山小学校の伝統と歴史を築いてきた卒業生の想いを引き継いでいけるように、さらに10年後、20年後、そして50年後にも、「中山がふるさと」と胸を張って言えるような教育活動を目指したいと思いました。

以前、先輩に「教育は、未来を創る仕事だ」と言われたことが思い出されます。今という時をしっかりと進めること、それがすばらしい未来を創るということ、この50周年記念行事を通して、大きく感じているところです。

子供たちのために

佐藤 俊明 (田子小学校)

今年で32年目を迎える田子小学校ですが、開校当時は学校の周りに家は無く、職員室の窓から新幹線が田んぼの中を疾走する姿を見ることができたそうです。現在は家が建ち並び、大きな市営住宅もあちらこちらに完成しました。子供たちも、様々なところから転居して、田子小学校に通っています。どの学校でも復興に向けて取り組まれているところではありますが、本校でも心に寄り添い支援を必要とする児童が在籍しております。そのような中で、誰でも安心して楽しく通える学校となるために、まずは「挨拶」「安全」「温かな声掛け」を全校で取り組んでいるところです。前校長をはじめ、歴代の校長が築き上げてきた本校の伝統を引き継ぐとともに、変わりつつある地域の中で、学校に求められることや課題に対して柔軟に対応しながら学校経営を進めていくことが大切であると感じています。

教職員と共に保護者や地域と連携しながら、これからも「子供たちのために」を中心に据え、学校経営を推進していく決意です。

教職員の幸せを願って

千葉 明 (南中山小学校)

遡ること2年前。30代前半の男性教員が人間ドック辞退届を提出。私は辞退理由があるに違いないと勝手に判断し、教頭欄に決済印を押した。

すぐさま当時の校長が、「教頭さん、辞退理由を本人に確認したのか？」と尋ねられたので、「すみ

ません。聞いてませんでした。」と返答した。

すると間髪入れずに、「教頭さん、人間ドックを受診しなかったために、もし悪い病気があって発見されなかったらどうするつもりだ。この教員だけでなく若い先生方は、親から預かった大切な職員だ。我々は、全教職員の心身の健康にも責任を持たなければならない。」と管理職としての責務について話されたのである。

この4月、校長として南中山学校小学校に着任し、改めて「教職員の幸せを願う学校経営こそが、学校に好循環を生み出す」ことの重要性について再認識した。「教職員のことを大切に考え、声を掛けたり励ましたりしてくれている」と感じる教職員が増えるよう日々精進していく所存である。

地域とともに

鎌田 雅博 (福岡小学校)

秀峰泉ヶ岳を望む福岡小学校に着任し数か月が過ぎました。学校を支えようという保護者や地域の皆様の温かさを感じています。

本校では、昭和50年より伝統文化教育として「福岡鹿踊・剣舞」に取り組んでいます。保存会の方々の指導の下、6年生が師匠となり、自分が学んだ「技」と「心」を4・5年生の弟子に伝承している活動です。脈々と受け継がれるこの活動をきっかけとして、保護者や地域の皆様、先輩方からたくさんのことを教えていただきました。現在行われている学校行事の由来、学校と地域が連携して取り組んだ歴史等、心豊かな児童の育成を目指した先輩方の熱い思いを実感しました。

教育目標の実現のためには、学校が単独で取り組むべき課題もありますが、学校が保護者や地域とともに取り組んでこそ実現できるものもあります。保護者や地域の皆様の支えに感謝するとともに、先輩方の思いを受け継ぎ、「地域とともに歩む学校」を目指し、微力ながら学校経営にまい進する所存です。

バトンをつなぐ

浅野 郁子 (福室小学校)

校長室前に置いた朝顔の水やりに1年生の子供たちがやってきます。ある日校長室をのぞいて、「この写真は校長先生のお父さんですか?」「なんでこんなに写真があるの?」と聞いてきました。校長室の歴代校長の写真を尋ねられ、「福室小学校の校長先生方だよ。」と答えました。「浅野校長先生の写真はな

いの？」と聞かれ、「校長先生はまだ何もしていないから、これから頑張るね。」と答えました。

歴代校長が中心となり築いてこられた校風と保護者・地域からの大きな信頼のバトンを受け継ぐ責任の重さを実感した出来事です。私に何ができるのか不安はありますが、これまで育てていただいた福室小学校の良さをつなぎながら、チャレンジする姿勢も大切にして、目の前の子供たちの笑顔をしっかり守っていこうと思います。情熱あふれる先生方と、笑顔で協力してくださる保護者・地域の方々を合わせ、「豊かな心を持ち、たくましく生きる児童の育成」を目指して学校教育を推進していきたいと思っています。

大阪府北部地震発生に思う

板垣 和幸(野村小学校)

平成30年6月18日、近畿地方で震度6弱の大きな地震が発生、崩れたブロックの壁で9歳の子供の尊い命が失われた。ほぼ1週間前の市民防災の日に実施した避難訓練の事後指導で、私は1978年宮城県沖地震で倒壊したブロック塀の写真を子供たちに見せながら講話を行った。

東日本大震災からの復興に向け、「防災対応力の育成」を目指し、学校経営を進めていく中、こうして繰り返される地震の被害を見ると、いかに「自助」の力、防災実践力の育成、また日常の安全管理が大切であるか痛感させられる。

学校は安全で楽しい場所でなければならない。私

は校長として、子供たちが「安全に楽しく学べる学校」作りを目指し、防災対応力を身に付けさせながらも、日々の学校の安全管理、さらに地域と顔の見える関係作りを進め、協力して安全・安心な学校経営を進めていかなければならないと、改めて感じている。

二つの出来事から

松永 弘一(沖野東小学校)

校舎の東、北、南側には田や畑が広がる緑豊かな沖野東小学校で3か月が過ぎようとしています。

前任の校長から引き継ぎ、毎朝、正門前の横断歩道で登校指導をしています。4月のある日、門の前で一人の女性から声を掛けられました。東六郷小学校に勤務したときの保護者でした。震災後の様子を伺うと、「子供は資格をとって元気に働いています。」とのこと。この地域にお住まいであることも分かりました。

今年入学した1年生は震災後に生まれた子供たちです。日常生活が落ち着かない時期の子育てはさぞ大変だったろうと想像されます。昨年度末、ある保育園の卒園式で保護者の方々がその当時の苦労や悩み、そしてこれからの成長を願う気持ちを切々とお話しになりました。心に響く言葉でした。

今後、震災を経験していない子供が増えていく中で、どのような取組が必要とされるのか。保護者や地域の方々の考えや思いも十分に受け止めながら学校経営に取り組んでまいりたいと考えています。

編集後記

平成最後の夏となる今年も、復興の思いと感謝の気持ちを込めた児童生徒らによる七夕飾りが仙台の街に飾られました。「星に願いを～伝える感謝 つながる思い～」をテーマに、仙台市内小中学生によって折られた八万八千羽の折り鶴からなる七夕飾りを、街行く多くの人々が見上げ、復興への思いを新たにしたことと思います。

さて、この度は、会員の皆様の御協力により、「廣瀬川」第94号を刊行することができました。本号では、「復興に向けた新たな取組を通し、未来を切り開くたくましく生きる子供を育てる学校経営」というテーマに、地域とともに、特色ある教育活動や心豊かでたくましく生きる子供の育成に取り組んでいる学校の具体的な実践を御紹介いただきました。

また、今春退職された28名の皆様方からは示唆に富んだお言葉や、心強いメッセージをお寄せいただくとともに、18名の新任の皆様方からは、学校経営に対する決意や熱い思いを寄せていただきました。

本号が、仙台市が目指す「時代の変化を受けとめ、未来を切り開いていく力」に満ちた子供を育てることに資する学校経営の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、御多用の中、玉稿を賜りました皆様方に心から感謝を申し上げます。

(94号チーフ 佐藤 記)

編集担当者：佐藤正文(岡田小) 中廣 治(将監小) 鎌田雅博(福岡小) 大森喜美子(川前小)